

冠詞

ご存じのように、ヨーロッパの印欧語には冠詞を持つものが多数あります。名詞・形容詞に性・数・格変化がある言語では定冠詞や不定冠詞も同様に変化するのが普通です。多くの言語では、定冠詞は指示形容詞に、不定冠詞は数詞 **one** に由来するからです。

ゲルマン語、ロマンス語、ケルト語、ならびにセム語は一般に定冠詞を持っており、他にも定冠詞のある言語はあります。

ゲルマン諸語のうちドイツ語の **der** は **der, des, dem, den** などと完全に性・数・格変化します。オランダ語は中性のみ **het** でその他は複数も含めて **die** の形で格変化もありません（男性と女性も融合して通性/両性と呼ばれています）。現在の英語の定冠詞 **the** とその前身である中英語の **þe** は無変化ですが、古英語の **se** は性・数・格変化しました。

ロマンス語のフランス語、イタリア語、スペイン語では性・数変化します。スペイン語では単数男性 **el**、女性 **la**、複数男性 **los**、女性 **las**、中生単数 **lo**、イタリア語では単数男性 **il/lo**、女性 **la**、複数男性 **i/gli**、女性 **le** となっています。スペイン語、ポルトガル語、フランス語などの名詞や形容詞の複数形はラテン語の複数対格 **-ōs** や **-ās** に由来する **-s** の付いた形を取りますが、イタリア語やルーマニア語ではラテン語の複数主格 **-ii** や **-ae** から来た形を使っており、冠詞も同じ語尾を取るわけです。また、属格は前置詞 **de** や **di (of)** と融合した形を取り、他の前置詞にも融合するものがあります。イタリア語では、所有形容詞 **mio (my)** などと定冠詞と一緒に使われます。

ギリシア語の冠詞は性・数・格変化し、単数主格は男性 **ο**、女性 **η**、中性 **το** です。指示詞があればその後に定冠詞を付けます。 **το κορίτσι (the girl)**、**αυτό το κορίτσι (this girl)**

ケルト語のうちアイルランド語とスコットランド・ゲール語では単数 **an**、複数 **na** と数変化します。ウェールズ語では **y** のみです。ブルターニュ語は **an** ですが、後続名詞の頭音によって **al**、**ar** などの形も取ります。ウェールズ語でも指示詞と定冠詞が同時に使われます。 **y ferch (the girl)**、**y ferch hon (this girl)**

ハンガリー語では、定冠詞は **a/az**（母音が続く場合）で無変化ですが、指示代名詞 **a/az (that)** と同形です。また名詞を指示詞の **e/ez (this)** や **a/az** が修飾する場合にもその後に定冠詞を置く必要があります。指示詞の方は数・格変化します。

azt az állatot (that animal) **azokat az állatokat (those animals)**

ポリネシア語にも冠詞があるとされています。定冠詞はサモア語で **le**、タヒチ語で **te**、ハワイ語で **ke/ka** です。マオリ語では単数 **te**、複数 **ngā** と単複の別があります。タヒチ語では単数 **te**、複数 **te mau** の他に双数 **nā** もあるそうです。

セム語のアラビア語では定冠詞 **al-** は後に来る名詞と一体として綴られます。ヘブライ語の **ha-** も同様に接頭辞の形です。いずれも変化しません。なお、**al-** の頭母音 **a** は前の言葉の末子音に吸収されて発音されず、子音 **l** は後ろの単語が **s, t, r, n** など一部の子音（太陽文字）で始まるとき、それと融合します。'**arsala al-rasūla** → '**arsala r-rasūla (he sent the messenger)** **ha-** も後ろにある種の子音が来るときは **he-** に変わり、前に前置詞 **l' (for)**、**b' (in)**、**k' (like)** が来るときはそれと融合してその音を変化させます。

アラビア語では指示詞がある場合にも冠詞を付けます。 **hādha r-rasūlu**

また、アラビア語でもヘブライ語でも後ろに修飾する形容詞が付くときは形容詞にも冠詞が付き、それが複数

あるときは幾つでも付きます。 al-madīnatu-l-mukaddasa (the sacred city)

古典ギリシア語でも形容詞が後ろに来るときは両方に冠詞が付きます。

定冠詞が名詞の末尾に接尾辞として付く言葉もかなりあります。これを後置冠詞と言います。始めて見ると変な感じがしますが、形容詞が名詞の後に付く言語はかなり多いので、当然のことかもしれません。ブルガリア語、ルーマニア語、アルバニア語などバルカン半島の諸言語がそうです。これらの言語はそれぞれ系統が違いますが、互いに共通する特徴が後置冠詞以外にも幾つかあり、そのためバルカン言語連合と呼ばれています。

ブルガリア語では単数男性-ät、女性-ta、中性-to、複数男性・女性-te、中性-taと性・数で変化し、単数男性の主格以外では-äとなるので格変化もあることになります。ブルガリア語では、形容詞が名詞の前に付くと形容詞に後置冠詞が移ります。同系のマケドニア語もほぼ同形ですが単数男性が-otに統一されているので格変化はありません。なお、マケドニア語では、指示詞 ova (この)、ona (あの)も冠詞化し、ot (<ota その)の t を v、n に替えた形を取ります。

ルーマニア語では後置の定冠詞は性・数・格変化し、主格・対格男性 -l/-le/-ul、女性-a、属格・与格男性単数 -lui、女性 -ei、男・女性の複数属格・与格は -lorです。中性名詞もありますが、単数では男性、複数では女性と同様に振舞います。形容詞は名詞の後に来るのが一般的ですが前に置くこともでき、その場合は後置冠詞も形容詞の語末に移動します。また、所有形容詞の前に後述の所有冠詞が付いてできる所有代名詞では所有形容詞と冠詞が共起していることになります。cartea bună (the good book) - bună carte cartea mea bună (my good book)

アルバニア語でも冠詞は性・数・格変化するとされています。単数主格では、男性-i、女性-aなど、複数主格は-(t)ëです。しかし、活用の形からみて、後置冠詞が変化するというよりも、名詞に定性と不定性の形があり、それぞれが格変化すると考えた方がよいと思います。やはり形容詞の前方移動に伴って冠詞が移ります。その他に、名詞に後置される形容詞などの前に付く形容冠詞があり、男性 i、女性 e などの形です。

バスク語の冠詞 -a は数・格変化し、格語尾が冠詞の後に付きます。形容詞が名詞に後続するときは、それに接尾します。 etxe handia (the big house) etxe handian (in the big house)

アルメニア語の定冠詞は変化せず -ə、母音の後で -n です。指示詞と共起します。

ブルガリア語、ルーマニア語では、前述のように、形容詞が名詞の前に来ると形容詞に後置冠詞が移ります。

北ゲルマン諸語でも、スウェーデン語では単数通性(男性+女性)で -en/-n、中性で -et/-t、複数では名詞の語尾に応じて -na/-a/-en の形の接尾辞となります。したがって性・数変化があることになります。デンマーク語では単数通性 -en、中性 -et、複数が -ne とより簡単になっています。ノルウェイの国語の一つで方言から再構築した形であるニューノルスクでは男性・女性・中性が形容詞と同様に単複とも別の形になっています。最も古形を保つアイスランド語も後置型で、男性単数が -inn、性・数・格変化します。これに加えて、独立型の前置形 hinn もあり、性・数変化に加えて格変化もしますが、使用は任意だそうです。

形容詞が前にあるときは北ゲルマン語でも定冠詞は前に来て、スウェーデン語では、単数通性 den、中性 det、複数 de の形を取ります。

den stora by (the big village) 前置冠詞と並んで名詞にも後置冠詞を付けることもあるそうです。

den stora byen デンマーク語にはこの用法はありません。

トルコ、シリア、イラク、イランの国境山岳地帯で話されるクルド語は、大別して3つの方言があり、違いも大きいのですが、中央方言では名詞は単複の別だけあり、後置の定冠詞-akáがあるそうです。

ベンガル語では冠詞は指示詞と同様に後置され、単数 -ṭa/-ṭi、複数 -gulo/-guli (-iはフォーマル)、生物では複数に -era/-ra も可です。格接辞は後置冠詞の後に付けます。

エチオピアのアムハラ語も定冠詞がありますが、同じセム語のアラビア語などとは違って、後置型です。名詞が子音で終わるときは -u、母音で終わるときは -w の形です。

西アフリカはセネガルのウォロフ語にも後置の定冠詞のようなものがあり、近称 -i (this) と遠称 -a (that) の区別があります。さらに単数で8種、複数で2種ある名詞の名詞クラスごとに、異なる子音はその頭に付いて、gi/ga などの形になります。

アフリカの角で話されるソマリ語は、名詞が性・数・格変化しますが、後置型の定冠詞をもち、男性 -ki/-ka、女性 -ti/-ta を基にして格によって母音が変わるそうです。

多くの言語では指示形容詞や所有形容詞が付いた名詞には定冠詞は不要ですが、定冠詞が指示詞と共起する言語にギリシア語、アラビア語、ハンガリー語、アルメニア語があり、スウェーデン語も必須ではないが可能で、ルーマニア語では指示詞が後置のままである場合にのみ定冠詞を用います。所有形容詞 (myの類い) と共起するものにはイタリア語、ルーマニア語などがあります。上記のように、それぞれの形容詞にも定冠詞が付く場合や、形容詞の存在や位置移動に伴って冠詞が移動するケースもあります。

名詞に定性を与えるために名詞に冠詞を付ける以外の方法を探っている言語もあります。

スラブ語のクロアチア語やスロベニア語では形容詞の短形と長形で定性と不定性を区別しています。バルト語のリトアニア語やラトビア語も同様です。

Ser/Hrv nov grad (a new city)、novi grad (the new city, a certain new city)

Lith. balta knyga (a white book)、baltoji knyga (the white book, a certain white book) ;

Lat. balta māja (a white house)、baltā māja (the white house)

リトアニア語、ラトビア語には定冠詞はありませんが、形容詞に限定形があり、形容冠詞と呼ばれます。形容詞に三人称の代名詞が付いた形ですが、定冠詞の代用としての使用は限られており、固有名詞などによく用いられているそうです。

juoda jūra (黒い海) に対して Juodoji jūra (黒海) など。

ルーマニア語には指示冠詞 cel があって性・数変化しますが、これは、名詞に数詞が前置された場合に定冠詞を付けられず、その代わりに数詞の前に付けるものです。 cei trei oameni (the three men)

ルーマニア語にはまた、所有冠詞 (属格冠詞) al があってやはり性・数変化し、主名詞とそれを修飾する属格の名詞を連結する働きをします。

un avion al companiei TAROM (タロム社の飛行機) companieiは companieの属格

不定冠詞

定冠詞のみがあって不定冠詞がない言葉には、アイスランド語、アイルランド語、ゲール語、ウェールズ語 *y(r)*、ブルガリア語、マケドニア語、アルメニア語、ヘブライ語、エスペラントなどがあります。

英語などゲルマン諸語では不定冠詞が単数のみであり、ギリシア語も同様です。ドイツ語やギリシア語では性と格で変化します。アイスランド語には不定冠詞はありません。英語ではご存じのように後続の名詞の語頭音に応じて *a/an* の二つの形があります。余談ですが、*apron* は元は *napron* だったのが語頭の *n* を冠詞に奪われ、逆に *nickname* は冠詞から *n* を奪ったものとされています。

ルーマニア語では不定冠詞は前置され、性・数・格変化します。主格・対格男性 *un*、女性 *o*、属格・与格男性単数 *unui*、女性 *unei*、男・女性の複数属格・与格は *unor* であり、複数主格・対格は *niște* で代用しています。

アルバニア語にも前置の不定冠詞 *një* があります。

ケルト語ではブルターニュ語のみに不定冠詞 *un* があります。これも定冠詞と同様に後ろの子音に応じて *ul*、*ur* に変わります。

ポリネシア語の不定冠詞は、サモア語で *se*、タヒチ語で *e*、ハワイ語とマオリ語で *he* です。サモア語では定冠詞も不定冠詞も前置詞と一緒に使うことができますが、タヒチ語とハワイ語では、不定冠詞は前置詞と共起しません。逆に、タヒチ語とハワイ語では、不定冠詞+名詞が述語となることができますが、サモア語ではできないそうです。

スリランカのシンハラ語には定冠詞はありませんが、後置の不定冠詞があり、有生の場合は *-ek*、無生なら *-ak* です。

ロマンス語のうちスペイン語には不定冠詞複数形 *unos/unas* があり、ポルトガル語も同様です。単数形からの類推ですが、ラテン語の時代でも *unos* という形はあったそうです。

フランス語やイタリア語には属格前置詞+定冠詞複数形が融合した *du* や *del* などの部分冠詞というものがあり、“いくらかの/いくつかの”の意味で使われます。これは不可算名詞用の不定冠詞であり、またその複数形 *des* や *dei/degli* は不定冠詞複数形の代用をします。

フィン語の分格 *-a/-ä/-ta/-tä* は、物質名詞が目的語になるときや否定文の目的語など、部分冠詞に似た用法があります。スラブ語の生格(=属格)にも似た用法があります。ハンガリー語でも定冠詞+出格 (*-ból/-ból out of*) を部分冠詞の意味に使うそうです。

ペルシア語では不定の名詞に *-ī* を接尾します。この *-ī* は後置の不定冠詞とみなされることもありますが、関係節の先行詞を標示する機能もあります。

アラビア語では不定の場合、主格 *un*、属格 *in*、目的格 *an* と名詞の語尾に *n* (タヌウィーン) が付き、不定冠詞と同じ働きをしています。

ドイツ語の *kein* (*no*)、オランダ語の *geen* は否定冠詞と呼ばれています。

タヒチ語には人を表す名詞に前接する人称冠詞 *'o* があるそうです。E fa'ehau 'o Rui (ルイスは軍人だ)

定性を表す他の手段

冠詞が表す特定か不特定かの概念を冠詞以外の手段によって表す言葉もあります。日本語の“は/が”にもその働きがあります。「昔々ある所にお爺さんとお婆さんが・・・お爺さんは山へ・・・」というわけです。

ペルシア語では、目的語が定性のとき *rā* を付加します。シリア語で前置詞 *to* に由来する *l-* も同じ働きをするそうです。

トルコ語などのテュルク諸語では直接目的語が定の場合だけそれに対格語尾を付け、不定の場合は格語尾をつけず主格のままです。しかも *bir (one)* が付いていないと単複の別も明らかになりません。

adamı gördüm (I saw the man) adam gördüm (I saw a man/I saw men)

セム語には後ろの名詞が属格で前の名詞を修飾する所属形 (*construct state*) という形があり、前の名詞もそれを示す語尾を取ります。

Ar. *malikaṭ saba'*、 Hev. *malkat šəva*、 Geez. *nəgəsta s̄abā* (Queen of Sheba)

アイルランド語やウェールズ語などのケルト語も類似の構造をとるそうです。

doras an tí (the door of the house) tí は *teach (house)* の単数属格、*doras (door)* に定冠詞が付いた形は *an doras*

先に触れたように、アルバニア語の名詞には定形と不定形があり、それぞれ性・数・格変化します。

qytet (都市) 男性

定/不定	単数主格	対格	属格・与格	奪格	複数主格・対格	属格・与格・奪格
不定	<i>qytet</i>	<i>qytet</i>	<i>qyteti</i>	<i>qyteti</i>	<i>qytete</i>	<i>qytete</i> <i>qyteteve</i> <i>qytetesh</i>
定	<i>qyteti</i>	<i>qytetin</i>	<i>qytetit</i>	<i>qytetit</i>	<i>qytetet</i>	<i>qytetet</i> <i>qytetevet</i> <i>qytetevet</i>

ハンガリー語には動詞に定活用と不定活用があります。定冠詞付きの名詞や指示代名詞など特定のものを目的語とするときは定活用を使い、定活用で目的語がないときは *it/him/her* を含意しています。目的語なしや不定のものを目的語とするときは不定活用を使い、自動詞には当然この形しかありません。例外として、目的語が一人称および二人称代名詞の場合は不定活用が用いられます。

なかでも主語が一人称で目的語が二人称単複の場合は特別の語尾 *lak/lek* があります。

したがって、*szeretlek* 一語で *I love you* の意味を表せます。cf. *szeret téged (he loves you)*

日本語、中国語、フィン語、東西スラブ語など定冠詞がない言葉では、必要な場合は指示詞で代用します。不定は *one* や *some/a certain* に相当する言葉で表します。冠詞と指示詞や数詞との違いは、特定の条件の下で必ず使用するか否かです。